

基礎スペイン語教育についての覚書

大 林 文 彦

序 言

私は本学スペイン語学科の一員として、専門科目やゼミナールの他に、基礎文法と講読演習も担当している。また、他大学や社会人対象の場所で基礎文法・会話を教えた経験もある。なお、私の専門はラテン・アメリカ文学である。

本学では約 17 年、それ以前を含めればかれこれ 20 年ほど、スペイン語教育に携わってきたが、以下は、そのような人間の基礎スペイン語教育に関わる独断と偏見に満ちているであろう説であり、今後絶えず修正しなければならぬようなノートにすぎない。たかだか 20 年ほどの私的体験の正直な告白を紙数の許す範囲で行なうことを許されたい。以下、スペイン語を教える対象としての学生であるが、私は中・高校での英語教育を一応受けた大学生（語学が特に得意でない）、社会人であって卒業後数年を経、実務・私生活で特に語学に接していなかった人などを漠然と考えている。

I 発音について

スペイン語との関わりという点では、私の生まれたころアルゼンチンにいて、やはりスペイン語畑の父を持つ私の場合は変わっているのかも知れない。幼年時代に父が持ち帰ってきた 30 年代のタンゴ黄金時代のレコードを、父が手廻し蓄音器でよく聴いていた。カルロス・ガルデルやその他の歌手たちの遠い歌声を耳にしたのが、私の初めて聞いたスペイン語だろうと思う。その後も少年の娯楽としてタンゴのレコードを廻したり、父と父の友人たちが取り交わす会話の中から片言のスペイン語をとらえることもあった。高校時代の反抗期から東京外語入学までは英語に力を注いでいて、カセット・テープのような手頃なもののない時代であったし、特にスペイン語に関心は持っていなかった。東京外語ではスペイン人教授 1 人が

外人教師であった。若いころ 共和政府から派遣され、そのまま帰国されず、私たちは父子で教わったムニョス先生である。私が知った先生は晩年の時分で、やわらかいお声の持主であった。学生時代はムニョス先生との会話の時間以外は、学校にあったリングフォンのスペイン本国版のレコードや、ガルシヤ・ロルカの演劇テープが二、三利用できたように思う。オープン・リールのテープレコーダー（の重いもの）を自分用には買えるのは一部の金持ちの学生だけであり、フランス語の学生などはシャンソンのレコードを擦り切れるまで聞いたりしていたが、スペイン語のレコードなど高価なリングフォン以外はほとんど入手できない時代だった。会話が好きな同級生は丸善などで当時あまり輸入されていなかった英米のスペイン語会話の本（“Brush Up Your Spanish”という古風な挿絵のある本が印象に残っている）を入手し、変な熟語をムニョス先生に連発しては悦に入っていたりした。私は学生時代は特に会話目的の勉強に集中していたわけではない。外語卒業後すぐに中南米を訪れたが、日常会話を通じ、相手の言うことも何とか分かり、中米からペルーを経てチリーにまで至った時、学校で言う標準スペイン語とは程遠い、波立つような早口のイントネーションがじつに美しいと思った。広大なスペイン語圏の、ラテン・アメリカの日常語としてのスペイン語により馳染んできたのが、私の場合である。私はその後の中南米諸国や短期のスペイン訪問といった実地体験、私自身の関心事を通じて、ラテン・アメリカ、スペインについてあるヴィジョンを抱いている。それは私が生きてきた過程で作り上げ、また私の今後の生とも密接に関わるものである。スペイン語圏についての知識は、最近の日本のような世界一といってもいいほど情報豊富な国のことだから、必要に応じてかなり多量に得られるし、カセット・テープ、レコーダー、レコードの類も安価になった。この広大なスペイン語圏は平均的日本人の日常生活とは縁遠い世界なのであるから、学生がこの世界について自分なりのヴィジョンをもって、道具としてのスペイン語を学ぶことが不可欠である。スペイン本国のカスティーリャ語以外の、例えばカタラン、バスク、ガリシヤ語の説明をして、カタラン、ガリシヤについての知識不足が普通の国なのであるから。

前置きが長くなってしまったが、大抵の教科書ではまずアルファベートの説明後に個々の発音練習に入る。アルファベットについては、英語以外

の外国語知識の欠如を露呈してか、奇怪な哄笑や抑えられた笑いとともに接する学生が多いように思われる。大方の学生はその後の学習につれて、字母のあるものについては正しい発音で記憶していない（例えば la te=T というように）から注意を要する。英語ならすぐ出てくるのだから、この点はしつこいくらい徹底させるべきだ。

アルファベートが割に簡単に発音できるように思えるので、個々の発音練習にも気易く入り込めるのは利点であるが、学生にはくれぐれも外国語の発音には常に最大の注意を払うよう指導すべきである。ロシア語やその他の言語と違い、アルファベートが楽に読めると、つい安易で雑な発音態度でスペイン語に接する学生が多く見られるからである。字母の綴りや筆記体に関しても、日本人で英語に接していれば特に抵抗もないから、そしてスペイン語はラテン語由来なのだからローマ字読みでよい、という教師側の親切心からの手引きなどが、時にこの安易な傾向を助長している。それには、スペイン語はやさしい、という大いなる誤解が存在していることも力になっているようだ。私はこの誤解を誤解として学生に徹底させるようにしている。

単母音については比較的楽に教えられると思う。日本語アイウエオをはっきり区別できる人間ならば、個々の母音発音に特に困難を覚えないはずである。時に地方出身者でこのうちイ・エ音の区別が明瞭でない場合があるが、私はスペイン語母音の発音に関する限り矯正できるように思う。e 音、i 音、o 音それぞれの開音閉音の区別については、個々の単語内での位置や文・句中での語の位置、発音状況などにより、それぞれの音が自然に発音されるのだと教えている。この段階でこれらの区別をしながら発音することは不必要であり、また不可能な場合のほうが多い。むしろ、テープや **native speaker** の発音を聞いて、その微妙な違いをとらえるほうが有益であろう。もっとも、やはりこの段階では、耳でこの違いをとらえることも不可能に近い。結局、単母音では、u 音を特に強く発音する必要があると強調（一番 **native speaker** から聞き返される音であるから）し、i 音も強目に発音するよう指導している。単母音の発音練習のこの段階で単語の発音を試みてゆく。アセントの規則を簡単に説明しても、学生は教師の発音をまねている時である。発音練習の単語で、日本語との連想を強く誘う語（*vaca* など）があったり、英語とのみ比較して外国語らしからぬ？

音の単語に接して笑う学生には、英語だけが外国語でないという初歩的啓蒙を行なわなければならない、島国日本の外国語教師の宿命であろうと思う。gue, gui, que, qui における u については、日本でのローマ字と異なるのであるから、u の発音練習時に必ず取り上げるのは言うまでもない。結局のところ、私は単母音の発音練習時には、u にもっとも神経を使っていることになる。

この時点での単語の発音練習で、強弱のアセントと母音の長短についても説明する。このうちアセントのある母音が、ない母音に対し 2:1 程度の長音となるのが普通だが、例外的に短いもの (casi など) もあるので、早くも経験主義的な注意を与えなくてはならない。私は経験主義的な教え方は初学者にとって良き刺激とはならないと思うのであるが。

次いで二重母音に移る。二重母音では ue 音と uo 音とに特に力点を置くようにしている。スペイン語はローマ字読みで良いという固定観念めいたものを抱く学生が、とにかく読めれば良いという雑な発音方法で簡単に片付けがちであるからである。下降二重母音では、語末の i が正字法上の習慣で y となることを注意する。三重母音では, uai (uay), uei (uey) の発音を慎重に練習する。二重母音, 三重母音の発音は日本人にとって難しいので, native speaker の発音に注意し, 練習を重ねるよう指導するわけである。

こうして母音の発音練習が一応終わる。練習によく使われる単語で学生が知っているものは, casa, rosa, sol, luna などであろう (あくまで主観的な印象にすぎないが)。大多数の学生は, スペイン語単語の多くは自分にとって未知のものであろうという予感をこの段階で抱くようである。

次に子音に移ろう。両唇音 b, v の摩擦音化については, 語中での位置や文中での語間の位置関係で自然に生じることを説明する。母音間のそれについての説明は理解されやすいようである。私としては, この段階であまりにこの摩擦音化に神経を使う必要はないと思う。個々の字母を一応正しく発音でき, 基礎文法の習得につれ, やさしい会話を取り交わす中で徐々に体得するほうがよいのではあるまいか。

f については, 必ず下唇を噛むように, 噛むことを忘れないようにと, 素朴な忠告を与える。与えないと噛まない場合が実に多く見られるからである。

歯間音 *c, z* が *s* 音化する現象については、本来の音と *s* 音とを両方使えるよう指導するのが一般的であろうが、学生の関心の対象地域がはっきりとしている時には、初めからどちらか一方の音のみを発音するようにするのも一つの方法ではないかと思う。対象地域の人々と会話を交わす際に、より自然な好感を持たれるであろうし、礼儀だと考えられないこともないであろう。両方を区別し、例えば航空機による急速移動により、両大陸間の広い地域で活動することが目標ではあるが、初歩的段階ではどちらかの音を発音するようにした方が心理的負担が軽いかも知れない。

t は歯音であるが、私には歯茎音化した発音もあるように思える。*d* の摩擦音化については、*b, v* のそれと同じ説明を行なう。語尾で消える現象について、カスティーリャ語発音では舌先が歯裏にきた感じが息の流れで分かるのに対し、中南米では一般に舌を *d* を発音する位置に移さないように思われることを教えるが、学生にとっては口を開けっ放しのほうが楽に違いなく、何となく雑な印象を受ける場合が多い。

いわゆる巻舌の *r* については、何度となく練習させる他ないようだ。ごくあっさりとその音を出せる者と、なかなか発音できない者というわけだが、とにかくこの多振動音を練習により発音できるよう指導しなければならない。

l については、*r* よりも神経を使い、舌先を歯茎に固定させた感じで発音するように練習させるようにしている。

硬口蓋音では *ll* がもっとも難物であろう。ジャ行音化、ヤ行音化（一部地域ではシャ行音化も見られる）の説明を行ない、あまり強いジャ行音化は下品な印象を与えると教えるのであるが、結局はカスティーリャ語発音、または軽いジャ行音のどちらかを初めのうちは発音していれば、しだいに種々の *ll* 音に慣れてくるにつれ、それらの意識的な発音をできるようになると私は思うのである。日本語にはない音として、*ll* や *ñ* の発音は慎重に行なう習慣を付けさせるべきであろう。

軟口蓋音では、*g* や *x* の摩擦音がどうしても弱くなるので、この点に留意しながら練習させる。喉の奥からハ行音を出させる練習を繰り返すわけである。*f* の下唇を噛むことと、この摩擦音を正しく発音することには、絶えず注意を喚起することである。*que, qui, gue, gui, güe, güi* についても、ローマ字と違うということで、よく慣れさせる。

x については、メキシコの例によく見られるような、地名などでの s 音などにも注意しておく。英語の影響からか、いつまでも h を発音する学生もいるのは論外なのだが、根気をなくしては語学を教えられない。

二重子音については、流動音の説明から練習に入るのだが、特に tr, gr, dr などの r の前に日本語母音オ・ウなどが入らないように気を付けながら練習をさせる。二重子音の正しい発音が大切なことは言うまでもないし、日本人にとっては容易とは言えないからである。

音節の分け方についての説明が終わると、アセントの位置をいわゆる三つの規則として教え、一群の単語で発音・分節の練習をする。これは徹底的に行なう必要があるし、また時には半年、一年後にも単語の分節練習を行なうことも効果的であろう。例えば idea, cree などのアセントを正しく付けられない場合が、それらの時点になっても見られることは、決して珍しいことではないからである。

スペイン語の短文や日常会話の一節を初学者に聴かせると、一様にその速さに驚く。単語そのものの発音は、どうにかやさしい気持でこなせる気分になる学生が多いのではないかと思うのだが、語と語を組合せての文、またその文と文との組合せで成りたつ会話となると話は別で、スペイン語はやさしくないのである。スペイン語は速いというのも実は一種の錯覚であるかも知れず、人間のことであるから、**native speaker** にも早口の人あり、遅い人ありだし、状況によってさまざまなわけである。要はまず耳を慣らすことである。人と人との意志疎通は言葉なしで始まると例えば考え、ましてスペイン語をとにかく知っているのであるから必ず通じることを学生が信じるというのか、知るとよいと思う。即ち、スペイン語はやさしくはないが、会話はできるようになる、と学生が思うところで、文法に入ってゆくのが望ましいのではあるまいか。最近の学生は、語学をやるということは会話ができることを意味するのだと思っている者が多く、せに、自分は会話が苦手だと思い込んでいる場合が多い。六年間の日本の受験を中心とした英語教育とは一応離れて、日常の平易なスペイン語会話はやればできるのであり、スペイン語会話ができるならば、フランス語、イタリア語のそれも、学習次第で比較的楽に取り組める、という意識を持てれば、英語は何と言ってもいちばん長い時間をかけて基礎を学んでいるのだから、と思えないものであろうか。

会話には耳を慣らすことだ、と学生はそれこそ耳にタコができるくらいに聞かされる。テープやレコード類が豊富に出廻っているのも、その点最近の学生は恵まれている。恵まれているののだが、時に受身な、一種の機械信仰めい態度が見られなくもないようだ。LL のブースに入りレシーバーを当てていれば、自分のレコーダーにカセットをかけておきさえすれば、自然に自分の発音が旨くなり、会話ができるようになると誤解しているような学生がいなくもない。昔の学生がレコードを擦り切れるほど何回となく廻していた時のような、音に対する細心の注意力が何よりも必要であろう。会話というものは、最低基礎文法とある程度の単語の知識の上に、ある人がその人間の条件というか、教養と言ってもいいものの上で、ある相手と必要に応じて肉声で交わすものであるから、ただ単に文法・単語力があり、耳が慣れていても、それだけで会話ができるものでもないことは力説しておいてよいのではあるまいか。

以上の発音について記してきた諸点は、私が一人で発音からスペイン語を教える場合に留意していることであり、その際テープも補助教材として使用するが、発音のみを外人教師が担当している場合でも、学生の発音に対して私が矯正しなければならない時には同様の注意を払っている。発音指導は **native speaker** に担当してもらうのが無論理想的であるが、補助教材としてのビデオ・テープが今後大いに活用されるであろうし、またすべきであると信じている。視覚面からもビデオは、スペイン語圏についてのヴィジョン形成にとっても有用であるに違いない。

II 動詞について

スペイン語基礎文法の習得が、動詞のさまざまな用法を軸として行なわれる以上、活用形から始まる多様な事項についてすべてを挙げることは到底不可能であり、ここでは日頃特に留意している点を中心にして記してゆきたい。

私は高校時代に本年逝去された O. ヴァカーリ氏の『英文法通論』を父の書棚に発見し、古い紙魚にやられたその本を日々蟻のような歩みで学んでゆくうちに、以前はよく分からなかった英語(学校では“**Jack & Betty**”の教科書で、**W. Irving** や **Hawthorne** の短篇などがあった)がよく分かるようになった経験を持つ。『新々英文解釈研究』といった古典的参考書

や、著者名や出版社を記憶していないが『英米現代文の研究』なども読み、高校三年の時、現在は焼失している当時野毛にあった横浜有隣堂本店二階に通じる木の階段を軋ませながら登って行った時のスリルをよく思い出す。あの洋書売場で初めて買った洋書は、W. H. Hudson の “Far Away and Long Ago” の Everyman's Library 版であった。寿岳しづ氏の岩波文庫の名訳『はるかな国 とほい昔』に親しんでいたのも、幼年時代からの遠い暗示があったからかも知れない。私の学生時代にはスペイン語の原書は日本ではまだ自由には入手できず、初めて手に入れたスペインの本は、東京外語で宮城 昇先生が教科書として使用された B. Pérez Galdós の “Marianela” だったと記憶しているが、一年生の教室で恩師会田 由先生にリーダーの訳を当てられ、一応訳せた時の喜びは今でもありありと思い出す。もっとも、その時、文中の中性代名詞 lo の誤訳を指摘されたこともいまもって忘れないのであるけれども。

このように、私は会話を通じてよりも本を読む楽しみで外国語に親しんでいった型の人間であろう。古いタイプなのである。しかし、その私から見ると、会話会話と目の色を変える学生が多すぎるような現在、しっかりと読解力を身に付けることも、真の会話力を養成する大きな力となることは説いて止まないつもりである。中身が空虚な人間は、紋切り型の成句をいくら暗記したところで、会話はたちまち途絶してしまうのである。そんなわけで、どちらかと言えば、私はやさしい会話よりも先に、少しでも文章が読めるようになることに喜びを見出すようであり、そのための学習では動詞活用練習は苦にはならなかった。英語しか知らずにスペイン語動詞の活用形に初めて接すると、ただその数の多さというか量に圧倒されたように感じる学生がよくいるものであるが、この点ばかりは、いわゆる学習意欲の効果的な喚起法が問題になり、そのような決定的でかつ普遍的な方法はまだない以上、ある目的のための手段、道具としてスペイン語をやるのであるから、最低限必要な努力であり、苦しみであると説いたりする。喜びは常に苦しみ の 後に来るものであり、涙なしに訪れてはくれない、などと。

スペイン語動詞の不定形が三種類であることは、教える上で非常に心の負担が軽くなるような気がする。四種類も五種類もある外国語を教える人の気持を無意識のうちに推し量っているのであろう。

不定形と言えば、語末の *r* を *native speaker* はよく巻舌の *r* 音で発音するが、これは恐らく、不定形であることに相手の注意を惹くためであろう。不定形の用法は、基礎文法ではもっと後に説明し、直説法現在から入るのがもっとも一般的である。

直説法現在の活用形と用法の説明時に、動詞の法の説明を行なうわけであるが、話し手の判断をよく表わしている法というものを簡潔に頭に入れておかないと、接続法の学習時に困惑することになる。高校時代の英文法学習時に、この法についてよく理解しなかった学生が多いように感じるからである。

この法は法それ自体として一つの形を示すのではなく、あくまで動詞活用語尾中に、人称・数・時制・態などと同時に含まれているのであるから、活用形が、つまり活用語尾がいかに大切かを学生に銘記させる。これは活用練習の際に、細心の注意をアセントにおくことでもある。*tomo* と *tomó* の違い、*toma* と *tome* の違いなどのように、スペイン語ではアセントの位置、弱勢語の区別音としての価値が重要であることなど、この段階では動詞の活用練習は発音練習をも兼ねて行なうこととなる。直説法現在形の発音では、三人称複数形のアセントを最終音節におく学生が必ずいるものである。*Carmen* のような覚えやすい単語とともに、*s, n* で終る語のアセントの位置を繰り返させる。もっとも、この点は *alguien* などの語でも同様の繰り返しがよく現われるので、こちらも根気よく繰り返す他ないようである。素朴な注意のようだが、活用形は何度でも書いて覚えることを徹底させるようにしている。ある活用形をいつでも完全に正しく書けることが、正確な発音に結び付くと考えられるからである。

ところで、直説法現在とは、つまり現在であり、だから訳語は「～する」の一点張りで、「～している」と訳せない学生がそう少なくもないのである。スペイン語の直説法現在とは、いわゆる現在進行形と強調の助動詞を付けた形（英語の場合）とを含んでいるのであるから、こうした現象を避けるため、「～している」という訳語から出発したほうがよいように思う。この「～する」という断定的な調子と「～している」との区別は、文脈、状況に応じて学生が判断するのであるから、このことも力説するのである。

規則動詞の活用練習と、*ser, estar* に始まる不規則動詞の活用練習とを比較した場合、私には不規則動詞の教科書中での適切な配置があれば、不

規則動詞の丸暗記式練習はさほど苦しくはないように見受けられる。何と言っても覚えにくいのは、語根母音変化動詞と、正字法上の変化を必要とするものや不定形が *-iar*, *-uar* で終わる動詞のようだ。20 才位の外国人が 20 才位の判断力を備えていながら、*hablo, hablas, . . .* とか、*muero mueres* と唱えるのであるから、時に砂を噛む想いであろうことは想像できなくもないが、語根母音変化動詞の直説法現在形は比較的容易なのであるし、また何度誤まっても、半年、いや一年位はその方が自然であり、外国語を学ぶ日本人には宿命的なことの一つなのだ、と説いたりしている。

基礎文法の習得と読解・会話力養成を結び付ける上で、平易で自然な文意の短文を用例として多く用い、所々にやや長い文章が文法復習を兼ねて用意され、作文もある教科書をだれでも使いたいと思う。しかし、完璧な教科書というものは見出すのが難しく、週二、三回の教室で教えることを考えたりすると、さまざまな制約を受けざるを得ない。現在日本の大学では週二コマの授業を、短大で一コマのそれを、いわゆる（第二）外国語の年間最低授業数としているが、短大の一コマというのは絶望的な、文化無視を露呈しているように思われる。これは脱線かも知れないが、公立中学校で英語を週三時間授業に縮少してしまうような発想に通じているのであろう。英語とスペイン語とは異なる二つの外国語であるけれども、母国語ではない言語を学んだ体験は大いに物を言うのである（スペイン語学習の上では、作文による表現力にまず現われるように感じる）。この意味で、公立中学校における英語授業時間の縮少が、外国語習得力の基盤を衰頽させはしまいか、危惧の念を抱く。

さて、このように週二回程度の授業で教える場合、*haber* と *estar*, *ser* と *estar* の相違の問題はかなり長い間学生の中でわだかまるのではあるまいかと思われる。*haber* と *estar* の相違の方は、日本語が「～いる（ある）」しかないことから来るので、慣れるのは時間の問題だと言えるようだが、存在を表わす *haber* よりも、どうも *estar* の方が強い印象を与えるように感じられるのである。例えばそれは人間以外のものよりも、人間の存在の場合で、*Hay mujeres.* とか、*Hubo varios hombres en la sala.* とかがすぐピンと来て分かる学生が意外に少ないことをよく感じる。

ser と *estar* の相違は、外国人にとってもっとも難しい事柄と考えてよいと私は思っているので、学生にもまずそう伝えるわけであるが、中でも

形容詞を伴う場合は、これだけに多くの時間を費すことが不可能なため、学生にとっては、スペイン語は難しいという印象を与えるのではあるまいかといつも思うのである。ser, estar の選択という時点で話し手の判断が表われているのであるから、その判断ということを入念に入れることだけは説くのであるが。

直説法現在を教えると同時に、主格人称代名詞とその省略についても教えるのが普通であるが、これは即ち語順の問題の第一歩でもある。私は主語代名詞の省略が常態というか、自然なスペイン語である、とまず説いて、動詞活用語尾に細心の注意を払う必要性を学生に再確認させる。明らかな敬意などでは全然なく、usted を用いないで、¿Quiere mostrarme su pasaporte? などと問われて、一人称で答える会話の場合などを例にして。語順の問題は、自分の音感に沿った好みの表現を試みたくて来た時であるとか、ある強調の必要性に応じる場合とか、いずれにせよかなり高度の知識が求められる性質の事柄だと私は思う。基礎文法学習上ごく初期の段階では、語順に関しては主語代名詞の省略が自然なことであることを理解させればよく、学生が作文（和文西訳）を行なう時は、(S+) V, (S+) V+O, etc といった、英語の標準文型に準じた型で文を組み立てるよう指導している。でないと、英語になんとか慣れているような感じを持つ多くの学生にとって、スペイン語は何とものっぺらぼうな言葉であろう、という印象を与えてしまいそうなので。

語根母音変化動詞の直説法現在形が終る頃再帰動詞の説明に入っていくのが普通なので、このあたりで基礎文法学習上私が留意している点について書いてみよう。最近の学生は英語の再帰動詞（昔は、反射動詞！もあった）についてほとんど知識を持ち合せていない者がいて困ってしまうが、とにかくこの難物を教える義務を持っているのは私たちだということを忘れるわけにはゆかないのである。大抵の人は、スペイン語動詞に自動詞が少ないので再帰動詞を使う（levantarse, acostarse の例など）のだという所から説明を始めるのであろう。しかし、その後大いにこの用法が多岐化し、ついには ser, estar のような自動詞にも再帰形が見られる云々と。もともと「文法」とは規則であって、生きた言語文化という躍動する形態の中から、文法学者が最大公約数的な一連の規則を抽出し綴り合わせたものが文法であるから、などと説いてはみるものの、再帰動詞に関しては、

一応の用法説明とともに、経験主義の助けを借らざるを得ないことがしばしばである。私としては、直説法現在の枠内で再帰動詞の説明をとにかく行なうのであるから、三人称単数形の再帰動詞にはとにかく特に気を付けるようにと説くのである。Se levanta と Se vende と Se va と、これはもっともやさしい場合であるが、主語代名詞の省略というよく見られる形態では、種々の用法が一見しただけでは容易には判別できないからである。

そろそろこのあたりで、学生が辞書を索いて動詞の不定形、形容詞などを見出すことができるようになる。これは余談だが、現在は高橋正武氏の『西和辞典』、『西和小辞典』（白水社）、宮城 昇・E. コントレラス両氏監修の、高橋氏の『西和』の恩恵を蒙っているに違いないと私の想像する『和西辞典』（白水社）があって、初学者はいわば無意識のうちに恩恵に与っているのである。私などの学生時代には、もちろん先人の大いなる努力に最大の敬意を払う者であるとはいえ、村岡 玄氏の『西和』と、丸善あたりの回転陳列枠に差し込んである安っぽい装丁の Chicago 大学編集の Pocket Spanish Dictionary などで満足する他なかったのである。同じポケット版でも Collins のものとか、大版の Appleton の辞典を教えてもらったのは、高学年になってからであった。あの頃は、丸善の洋書売場で目を皿のようにしてスペイン語の本や辞書を探したことを俄かに思い出す。

再帰動詞の第一歩の説明として、他動詞の自動詞化を挙げる。それに関連してというか、勿論他の機会でもいいのであるけれども、スペイン語動詞で、辞書には他動詞として記載されているが、文中目的語なしで自動詞として用いられることがよくあることを必ず説明するようにしている。頻度や学術的な統計を参照していない点では、いささか怠惰の誹りを甘受しなくてはならないかも知れないが、自動詞の他動詞化にも学生に注意を与えるようにしている。

直説法（不定）過去と同不完了過去とについては、書き言葉を読む上で、現在とともに基本を成すものであるから、普通、（不定）過去を教えてから不完了過去に移るのであるが、私はその際再び（不定）過去と対比し、区別するよう説くことにしている。ある物語や事件を書き手が表現する時、その物語や事件の筋そのものは（不定）過去が表わし、それぞれの筋とい

うか、全体の中の一つ一つの出来事の背景や事情を不完了過去が表わすのだと補足的に説明すると初学者にはもっとも説得的なように感じられる。物語や事件そのものを一つの演劇だとすれば、不完了過去は舞台装置や背景にあたるというわけである。

直説法過去で初学者にとって分かり難い場合が多いのは、*Ese verano estuve en España.* のような、過去の持続的な動作状態を示す場合である。これは話し手の、過去のある時点において完了したものという判断を示しているのであるから、現在完了の説明にも関わる問題である。現在完了については、ラテン・アメリカ諸国では、アルゼンチンのように、会話では現在完了を全くといってよいくらい使わない例もあることを、多様なスペイン語圏内の生きた言語形態の一つとして、この辺りで紹介したりするのであるが、過去を使うか現在完了を使うか、即ち話し手、書き手のある過去に起きた事柄に対する判断が左右するのだということを理解していない学生がいつもかなりいるようである。受験英語の暗記物風に、現在完了は完了や経験を表わす、と即座に答えて満足気な学生がよく見受けられるが、象やライオンを見たことがある、ということ表現するだけが現在完了ではないのだということから再出発を迫られることが多い。

直説法不完了過去（私は教室では過去に対する半過去という俗称を便宜的に使う）は、英語しか知らない学生を相手にすることが多いので、この時制がラテン系の言語では独立している便利さからまず説くのである。勿論、スペイン語の不完了過去の用法は、英語の過去進行形や、過去の習慣を表わす助動詞を伴う形よりも幅広いので、学生の側には戸惑いがあるだろう。その点で、外国人一般にとってと同様、（不定）過去と不完了過去との使い分けというか区別についてが、もっとも難しいようである。過去において繰り返し行なわれた動作、いわゆる過去の習慣を表わす際に、期間を限定し、明示する場合は（不定）過去を使い、さもなくば不完了過去を使うということも、学生にとって理解しやすすくない場合が多いようだが、結論的に断定することを許されるならば、ある時制というものが、話し手、書き手の判断を表わしているということ、つまり、この問題に限らず、この判断という観点に学生を上手に導くことが、今後のスペイン語理解に通ずると考えるのであるけれども、いかがなものだろうか。

動詞活用形の練習について、この（不定）過去と不完了過去とを見た場

合は、不完了過去形は容易に覚えられるように感じられるが、(不定)過去形には時間を取られる。活用形を覚える上で、この直説法(不定)過去形をがっちりと覚えることが重要であり、このいわば関門というか壁を越えれば、残りの活用形を覚えるのがずっと楽になる、と教えている。発音に関連しての話だが、三人称複数形 *-ron* の所にアセントを置いて発音する学生がこの段階においても依然として少なくないので、注意を要する。しかし何と言っても一番の難物は、語根母音変化動詞の活用であり、難しいからこそ乗り越えると後が楽だという代表のように感じられるのであるが、教師の説く体験主義には精神主義の匂いを嗅ぎとられるように感じ、後ろめたい。結局、語根母音変化動詞、特に不定形が *-ir* で終わるものの活用形にはつねに最大限注意を払うように、と忠告するのである。

不完了過去と(不定)過去とについて最後に一言付け加えるならば、物語体によく見られる(不定)過去の代りに用いられる不完了過去と、いわゆる歴史的現在とに、学生は初め戸惑うことがよくあるようである。

非人称形の中では、私は過去分詞の習得にもっとも力点を置くように指導している。過去分詞の形そのものは比較的短時間で覚えられると思っているが、形容詞として自由自在に使いこなせることが肝心である。いわゆる独立用法(述語的補語や目的補語であったり、名詞とともに独立した副詞句を成すものなど)の形容詞と同じものとして過去分詞が用いられること、再帰動詞、自動詞、他動詞のいずれであるかは過去分詞を見ただけでは分からないであろうこと、まず受身に直訳してみても文脈や不定詞とを考え合せ訳語を決定すること、などがつねに与える忠告である。

接続法について、このように限られた紙面で触れることには、私自身抵抗感が強いのであるが、今回挙げることが不可能な他の多くの事項中から、あえて最少限の関心事を記してみたい。まず第一に、接続法という法自体と、さらに名称とに、学生は正直なところ奇異感を第一印象として抱いてしまうと感じられる。英語のみの知識しか持たないのであるから、これは当然のことなのかとは思ふ。私はテキストなしで接続法を説明しなければならない時には、名詞節での用法を例に挙げることにしている。即ち、*Espero que estudien ustedes.* のような文例によってである。*Espero* という直説法で表わされた文は、話し手にとっての客観的事実を、*estudien ustedes* なる文は、非客観的、仮定的内容を表わしているのであり、それ

それぞれがある事柄に対する話し手の判断を表わしているという、この判断から説明を始めるのである。恐らく私の方法は普遍的ではないのであろうが、自分自身を納得させる方法であったからである。話し手がなぜある法を、またある単語を使っているのか、そこに働いている話し手の判断というものを理解しようとする態度が、私の基本的な態度であるからであろう。

この話し手の事実に関わる判断という点について、私の説明で欠けていると感じることは、いわゆる接続法の感情表現に関してであろう。Me alegro de que hayas tenido éxito. という例を取れば、hayas tenido éxito は客観的事実を表わしているからである。これについては、同一文中で直説法と接続法とが用いられている時、直説法の形が聞き手（読者）により強く伝わるからであると教えているのであるが、私も外国人なのであるから、この説明は自分ながら隔靴搔痒気味である。同じく感情表現の判断に関わるし、また仮言的内容等にも関わることであるが、Es ridículo que estudies tanto. や、Me importaba que te casases. などの文例に働いている判断を理解することが、初学者にとってもっとも難しいもののように思われる。

最後になるが、接続法（不完了）過去の学習が、主動詞を現在から過去に移した用例復習という形で行なわれるので、私としてはこの段階で改めて接続法現在の用法復習を兼ねて行なう必要をつねに感じる。そうでないと、接続法（不完了）過去の用法に慣れるのに時間がかかるように思われるからである。現実には、週二コマといった条件の制約を受けざるを得ないのであるが。

付 記

この小文は、本学外国語研究センターの共同研究活動を目指す「初習外国語の効果的教育法」（仮称）のための基礎作りの一端を担う意図で書き始めたものであるが、結果的には上記の内容しか書くことができなかった。多くの事項について触れたかったが、少しのことしか触れられず、それぞれの内容は貧しい。しかし、スペイン語を教えている人間としての一種の義務感から書かざるを得なかったのであり、その結果については私の浅学菲才に責があることは十分自覚しているつもりである。

日本におけるスペイン語教育は、周知の通り英仏独語のような分野と異

なってまだ歴史が浅い。現在ようやく、先人たちの努力の足跡を辿る有望な研究者、教育者たちの数が増えつつあり、今後は基礎文法教育の分野においても、現代に適合した有効な方法が十分確立されることと思われる。そのためにも、この小文について同学の諸氏から御意見、御批判を頂けるならば望外の幸せである。

本稿を書く際に、日本におけるスペイン語基礎教育の分野で、私がつねづね敬意を表している神奈川県立外語短大教授岡田辰雄氏の一連の教科書(『スペイン語の入門』から『わたしのスペイン語』に至る)を参照させて頂いた。参考書としては、私の読んだすべての本から何らかの影響を受けているに違いないのであるが、スペイン語基礎文法教育について私自身の根幹を形成してくれた本を下記に挙げることにした。

Harmer/Norton: A Manual of Modern Spanish, Univ. Tutorial Press, London, 1957 (2nd. Ed.).

M. M. Ramsey: A Textbook of Modern Spanish, H. Holt, New York, 1958 (Revised by R. K. Spaulding).

H. Ramsden: An Essential Course in Modern Spanish, G. G. Harrap, London, 1959.